

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

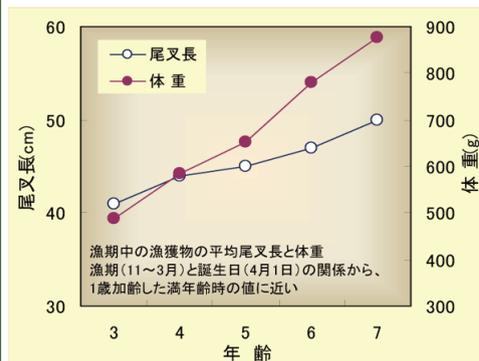
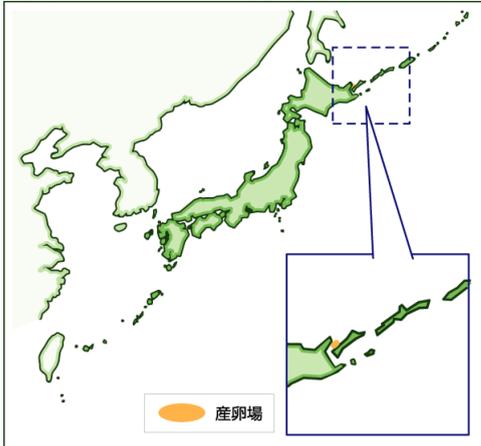
系群名 根室海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明(10歳以上)
 成熟開始年齢: 3歳
 産卵期・産卵場: 冬季(1~4月)、根室海峡
 索餌期・索餌場: 産卵期以外は、オホーツク海西部と推測されるが未解明の部分が
 多い
 食性: オキアミ類、カラヌス類をはじめとする浮遊性小型甲殻類、本海域で
 は、冬季に魚卵及び魚類を捕食している個体が多い
 捕食者: 海獣類

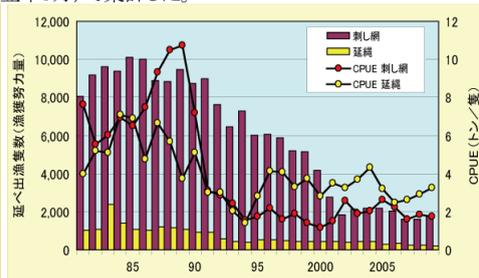
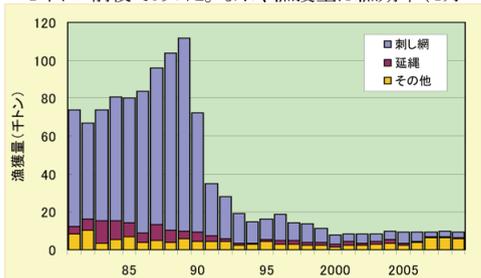


漁業の特徴

本海域のスケトウダラは、主として刺し網及び延縄によって漁獲される。操業期間は、延縄漁業が11月~翌年1月、刺し網漁業(専業船)が1~3月、その他刺し網が4~12月である。漁獲対象は、産卵のために来遊した親魚が主体である。以前は刺し網漁業(専業船)が漁獲主体であったが、近年はその他刺し網による漁獲量が増加している。なお、根室海峡中間ラインより国後島側の海域では、ロシアの大型トロール船が操業を行うことがある。

漁獲の動向

漁獲量は、1989年度に111千トンに達したのち急激に減少し、1994年度には15千トンまで落込み、その後も低迷を続け、2000年度には過去最低の7.8千トンとなった。2009年度の漁獲量はほぼ前年並みの9.5千トンであった。1986~1992年度には、ロシアのトロール船団が本海域周辺において15千~172千トンの漁獲をあげたが、2004年度以降は1千トン前後であった。なお、漁獲量は漁期年(4月~翌年3月)で集計した。

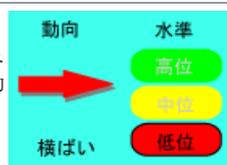


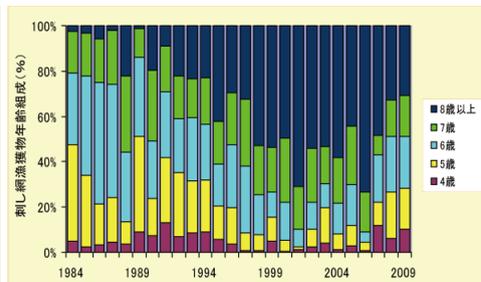
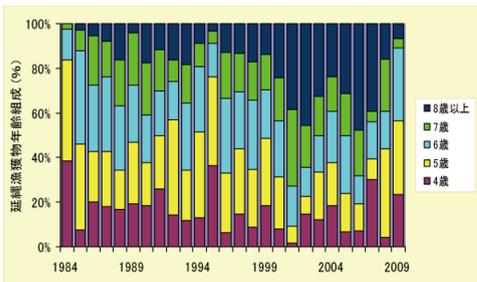
資源評価法

日本漁船による漁獲量とCPUEの情報はあるが、根室海峡中間ラインより国後島側の漁場では漁法の異なるトロール漁船による操業が行われており、この操業実態が不明のため資源解析は難しい。しかし、利用できる資料が他には無いため、ここでは、日本側の情報(日本漁船による漁獲量やCPUEの推移、漁獲物組成など)を基に、これまでに得られているロシア側の情報を考慮して資源状態を推定した。

資源状態

操業形態の変化などにより、刺し網漁業(専業船)や延縄漁業のCPUEを長期的な資源状態の判定に用いることは困難である。そのため、その他刺し網を含めた漁獲量を用い、資源状態を判断した。近年の漁獲量はピーク時の1割を下回る水準であり、2009年度も9.5千トンであったことから、資源状態は低水準と判断された。動向は2005~2009年度の漁獲動向から横ばいと判断した。漁獲物年齢組成から、これまでの漁獲を支えていた7歳以上の高齢魚の漁獲尾数が減少傾向にあること、2007年度に新規に漁場加入した2003年級群(2009年度は6歳)が近年では比較的豊度の高い年級であることが示された。





管理方策

本海域では、日本とロシア双方が主に冬季に来遊する産卵群を対象として漁業を行っているが、日本側の主要な漁法が刺し網、延縄であるのに対し、ロシア側は大型トロール漁船による操業を行い、その操業実態も不明である。また、若齢魚や産卵期以外の分布等も未解明であり、当該資源全体の動向や水準を検討するために必要な情報は不足している。現状では、資源量推定、F値、漁獲割合、将来漁獲量の算定など定量的な評価は困難である。よって、当該資源についてはABCの算定は行わず、参考値として、資源の動向に合わせ漁獲を継続するCave5-yr、漁獲圧を低減し資源の緩やかな回復を目指す0.8Cave5-yrを算定漁獲量として提示することと定めることとした。

漁獲シナリオ (管理基準)	F値 (F _{current} との 比較)	漁獲割合	将来漁獲量		評価	2011年算定 漁獲量
			5年後	5年平均		
漁獲圧を低減し、 資源の穏やかな 回復を目指す (0.8Cave5-yr)	—	—	—	—	—	7.6千トン
漁獲量の維持 (Cave5-yr)	—	—	—	—	—	9.5千トン

コメント

- 本評価群については、既存の情報からは資源量の算定が困難なことから、F値、漁獲割合、将来漁獲量の算定など、定量的な評価は行っていない
- 本海域のスケウダラ漁業は産卵回遊群を対象にした漁業であり、日ロ両国で行われている
- 日本水域における漁獲動向から、資源水準は低位と推測されることから、資源回復を図る必要がある
- 2006年度に設定された中期的管理方針では「ロシア共和国連邦の水域と我が国の水域にまたがって分布し、同国漁船によっても採捕が行われていて我が国のみでの管理では限界があることから、同国との協調した管理に向けて取り組みつつ、当面は資源を減少させないようにすることを基本に、我が国水域への来遊量の年変動にも配慮しながら、管理を行うものとする」とされている

資源評価のまとめ

- 操業形態の変化により、刺し網や延縄のCPUEを資源量の指標値とみなせなくなっている
- 漁獲量はピーク時の1割以下で低迷しており、資源水準は低い
- 漁獲量は横ばい傾向を示し、動向は横ばいと判断
- 隣接するロシア水域のTACは2008年以降増加傾向にあり、2010年は2007年比645%まで増加した

管理方策のまとめ

- ABCの算定は行わず、参考値としての算定漁獲量の提示とした
- 資源の回復のためには、現在より漁獲水準を引き下げることが必要
- ロシア側の漁獲状況の情報収集が必要
- ロシア側もTACを設定して漁獲規制を実施している

執筆者: 森 賢、船本鉄一郎、千村昌之

資源評価は毎年更新されます。